

超高齢で輝く方々の生き方・言葉から

今、高齢、いや超高齢で日本で最も輝いている人といえば、あのベストセラー「生き方上手」の著者・日野原重明さんと、日本で初めての障害児のための学校「しいのみ学園」を創立した昇地(しょうち)三郎さんでしょう。日野原さんは本年 95 歳、今も聖路加国際病院の理事長を務め、書き物や講演活動をしています。日野原さんについては別の機会にご紹介するとして、今回は昇地さんに絞っての話です。

昇地さんは今年ちょうど 100 歳。私が通信員をしていた「日経マスタース」(現「セカンドステージ」)の 2005 年 3 月号でこんなふうに語っています。(その生き方と言葉があまりに素晴らしく、学ぶこと多々ですので、引用が長くなってしまいました。さらに詳しくは「講演会のスピーチ」のページの「葛飾区シルバーカレッジでの講演」をご覧ください)



- 私の場合はまだ“百歳児”。歳の自覚がないんです。だから今年は、中国、米国、欧州諸国と世界一周の講演旅行を試みようかと計画しています。だいたい世間の人、年齢を基準にしてあれこれ考えたり行動したりする。これはいかんと思うんです。

昇地さんのホームページから 韓国の大学の関係者が今度、しいのみ学園を見学に来るんですが、そのときには全部韓国語で話してやろうと、今朝から一生懸命、辞書で難しい言葉を調べているんですよ。

中国語もですね。96 歳のとき、長春大学の名誉教授として講演することになった。どうせ向こうで話すのなら、中国語を勉強していこうと、NHKのラジオやテレビ講座のテキストを買って始めたんです。自分の考えを自分の言葉で相手に話したかった。それで中国語でスピーチしたらね、拍手、拍手。あのときは、それこそ人生の喜びというものを感じましたね。

通訳をつかったら簡単だとか、年なのがいいかげんにしたら、なんて言われるけど、新しいことを覚えるのは生きる力、私の生きがいのひとつなんですよ。

皆さんは、自分の年を考えすぎて、そのあげく、老感にさいなまれて、結局自分をダメにしてしまうようです。70 歳になったら 70 歳らしく、80 歳になったら歳相応に、余分なことはしない……。これではいけません。年甲斐もなくとか、老人のくせに、と考えるはいけないのです。

まず第一に、他人がなんと言おうと、自分は自分だ、という気持ちです。そういう姿勢がないと、自分の人生が他人に左右されてしまいます。

8 年前に家内をなくしてから、洗濯も私の仕事。お手伝いさんに食事を作ってもらいますがそれ以外は全部自分でしています。毎晩、風呂に入った後、残り湯を汲んで洗濯機に入れる。下着なんかを洗って干しておけば、朝にはもう着られるでしょう。私も意志の弱い人間だけど、毎朝 6 時にはスパッと起きて、冬でも冷水摩擦をしています。これももうかれこれ 60 年は続けています。

100 歳まで生きるなんて夢にも思わなかった。人生 80 年なら 65 歳ぐらいで死ぬ覚悟で

生きてきました。会社を辞めた人たちがそっくり年金や福祉を受ける側に回ったら、日本の社会は大変なことになりかねません。特に介護保険ですね。私は今も月給から、介護保険料を引かれているけど、これを1円も使わずに死のうと思っています。保険料だけ納めてね。

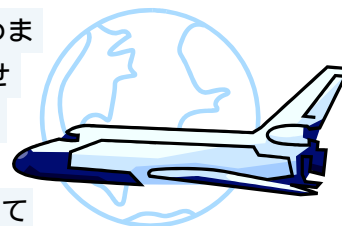
敬老とはお金をやって楽をさせることではない。多くの人が、年を取ったら、どんな介護のサービスを受けられるか、あれこれ考えているそうだけど、これはさびしい。そんなことばかり考えて人生を終えるなんて、男じゃないですよ。私も悩み事はあります。でもそれは気にしない。悩み事なんか蹴っ飛ばすくらいのつもりでいます。

老人を働かせ、老人に元気を出させることです。私も100歳にもなったら、ほんとうのところあと何日生きられるかわからない。タクシーに乗る時だって、ひょっとしたら、これは霊柩車になるかな、と思ったりしてね。

私の理想の生き方は、NPOなんですよ。つまり、長生きして(N) ぼっくり(P)と、往生(O)するってことですよ

本年1月11日の聖教新聞の「声の欄」に昇地さんの寄稿が載っていました。投稿主：福岡市南区 昇地三郎(しいのみ学園園長 100歳)としてです。投稿の内容は、地元の新年の勤行会に参加したときの感想等ですが、最後でこのように述べています。

「100歳前進、100歳勝利。私は、今年の手紙初めでそうしたためました。100歳になったからといって、ぼやぼやしてはられません。一昨年、アメリカ創価大学、昨年はハーバード大学で講演をするなど、2年続けて世界一周の旅をしました。本年は、モスクワ大学での講演が予定されており、ロシア語の勉強に熱を入れています。世界を相手に“前進、前進”の気概です」



実は、その寄稿を読んで間もなく、私は葛飾区のシルバーカレッジの講演会でお二人のことを話しました。でも、あまりにも高齢なので、失礼ですが話しの時点で万が一亡くなっているはいけないと思い、インターネットで検索してみました。と、なんと、昇地さんは1月にはハワイにいて、本年が創立100周年になるというハワイの大学で講演、またNHKのテキストを使ってロシア語の勉強をしている写真まで現れたのです。

なにか圧倒されてしまうような生きざまですが、私は軽いショックと共に、いろんな面で生きる勇気をいただくような気がしました。私たちに当てはめれば、高齢者は「退職者」であっても、社会の「引退者」ではない。60歳などは人生の中ほどなのだ！と・・・

読者の皆さんの感想はいかがでしょうか？